様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23　年　6　月　7　日現在

機関番号：14301
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2008～2010
課題番号：20320005
研究課題名（和文）　健康概念の哲学・倫理学的総合研究

研究課題名（英文）
An examination of the concept of health from philosophical and ethical point of view

研究代表者
水谷 雅彦　（MIZUTANI MASAHIKO）
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：50200001

研究成果の概要（和文）：
本研究は、曖昧なままにとどまっており、それゆえ様々な混乱の原因ともなっている「健康」概念を、哲学的、倫理学的な観点から再考したものであり、「障害」問題や「エンハンスメント」などの問題のみならず、「健康食品」に関する問題に関しても重要な提言をするに至った。
研究成果の概要（英文）：
This study examined the concept of health, which remains so ambiguous that it causes various kinds of confusion, from philosophical and ethical points of view, and made important proposals on problems not only of disability or enhancement, but also of health food.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2009 年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2010 年度	2,600,000	780,000	3,380,000
年度			
年度			
総　計	9,300,000	2,790,000	12,090,000

研究分野：哲学・倫理学
科研費の分科・細目：哲学・倫理学
キーワード：健康科学、公衆衛生、生命倫理学

１．研究開始当初の背景

健康は、我が国において過去何度目かの「ブーム」となっている観がある。「健康増進法」なるものの制定や、各種の「健康雑誌」の売れ行き、あるいは健康を題材にしたテレビ番組の増加、さらには健康を謳い文句にする食品や薬品の増加をその証左とすることができるであろう。にもかかわらず、WHO の健康概念をめぐる議論の迷走をみても、健康概念が十分な学問的吟味にさらされてきたとは言い難い。健康概念に関する先駆的な著作であるレナート・ノルデンフェルトの『健康の本質』は、まさに健康がもはや科学的な概念とは言い難いものであることを明らかにしている。事実、健康概念は、「人格」や「行為能力」、「感情」あるいは「文化」といったすぐれて哲学・倫理学的な概念との関わりでなければ論じることができない。過去に

は、たとえばガダマーの『健康の神秘』のようなすぐれた哲学書がないわけではないが、そのあまりの思弁性は、重要なヒントを与えてくれはするものの、我々が直面している健康に関する諸問題の具体的な検討というには遠いものがあるのも確かである。本研究は、この未踏の研究領域を共同研究という方法によって開拓しようとしたものである

２．研究の目的

本研究は、日本はおろか世界でもあまり例のない哲学・倫理学の観点からの健康概念についての共同研究であり、その意味では、まず健康概念の歴史的総括を哲学的倫理学的に行うことを目的とした。これは、健康を生命倫理的概念としてのみではなく、環境倫理、情報倫理といった各種応用倫理学を総動員して考察するという試みが、哲学、倫理学、哲学史、科学史といったより基礎的な研究の土台のうえにたって共同研究をおこなうことによってのみ達成されるという認識に基づく。

まず明らかにされたのは、健康概念の規範性である。「健康」や「健全」といった言葉は、つねにある種の道徳的な規範性とともに使用されてきたし現在でもそうである。しかしそのことは、これまでそれほど明晰に分析されてきたとはいえない。健康概念は、曖昧な概念でありつづけてきたにもかかわらず、それがあたかも科学的、合理的概念であるかのように国家政府や市民によって受け止められてきたがゆえに、歴史のそれぞれの時点おいて強力な規範的含意をもってきたといえる。たとえば明治以降第二次大戦終結までの日本においては、「健民」の名のもとに「優秀な兵士」「優秀な母性」の育成運動が国家的レベルで行われていたこと、そして国立公園などの環境政策も実はその一環であったことなどが近年の日本史研究において明らかになっている。本研究は、こうした健康概念の規範的含意を、それぞれの時代の科学認識のありかたをもふまえて倫理学の観点から明らかにした。

また、健康概念の現状に関する批判的考察がなされる。先述の WHO における健康概念に関する国際的な議論の迷走は、健康を「たんに病気ではないこと」以上のものとして位置づけた後に、そこに「精神性」といった契機を導入することをめぐって始まったといえる。このことは、健康概念が歴史的のみならず文化的な相対性をももっていることを意味する。健康が人間にとって基本的な価値の主要なひとつであることを疑う者はいないだろうが、さてそれがいったい何を意味するのかは明らかではない。本研究では、この相対性が解消されるべきものであるのか否か、もし仮に解消されるべきであるとすれば、それはどのような仕方でなされるべきなのかという問題を含めて議論し、健康概念をめぐる論議に哲学的な光をあてた。これは英米独仏中をはじめとする諸外国における「健康政策」のありかたを比較検討しつつ、「グローバル化」しつつあるとされる現代社会における健康概念の新たな構築の可能性について哲学的倫理学的に考察することにつながった。

さらに、健康概念が国家政府や行政の上からの押しつけだけで成立するものでないことも確認しておく必要がある。健康概念の生成、流通は、マスコミをはじめとするメディアや最近ではインターネットを通じて行われるが、そこにおいて働いている力を無視することはできない。本研究では、この点への目配りも行った。

３．研究の方法

本研究の特色は、特定の哲学的倫理学的立場からの健康概念へのアプローチと異なり、むしろ健康概念の学問的吟味を必須のものであると考える研究者による共同研究という点にある。本研究に参加する研究者の多くは、1986 年以来活発な活動を続けてきた京都生命倫理研究会や京都大学文学研究科における各種の共同研究の参加者であり、過去の研究資産の上になりたっている。その意味で、本研究は持続的研究の一環でありつつ、それを新しい方向へと発展させるものである。特に、健康概念をめぐる哲学。倫理学の領域での共同研究は日本はおろか世界でもほとんど例をみないものであり、その成果が果たした役割は大きい。実践的帰結としても、健康教育、保険問題、高齢者介護福祉問題、障害者問題といった領域に、新しい理論的指針を与えることにつながる。また、現在の医学のありかたに対する理論的かつ批判的な検討は、メンバーの何人かが委員をつとめる各種の医の倫理委員会や審議会などを通じて社会的に貢献した。さらに、これまで個々の問題に対応する必要から必然的にたこつぼ化してきた応用倫理学研究をあらためて有機的に再統合することにもなった。

具体的には、まず初年度には、　初年度は、基本的な文献収集を行うとともに、健康概念に関する書誌データベースを構築した。また、定期的に読書会を開催し、重要文献に関する知識の共有化を行うとともに、３回の研究会を開催した。これに加えて、マルクス・ステパニアンス博士（アーヘン工科大学）を京都大学に招いてドイツ憲法と健康概念に関する講演会を開催した。２年次は、前年度からの理論的研究に現実的問題を接続するという試みが遂行された。とりわけ、ノルデンフェルトの『健康の本質』に関する各種の批判的議論は、現実的問題との関わりにおいて理論的批判を行っているものであり、これらの精査は極めて有効であった。最終年度においては、前年度までの理論的研究、とりわけノルデンフェルトとブールスの理論の比較検討ということに加えて、新たに K. A. リッチマンの『倫理学と医療の形而上学』を中心とした研究が遂行された。同書は、前二者の義論をふまえて、自らの「埋め込まれた道具主義」という斬新な健康理論を提供しており、これの精査は、本研究の理論的まとめをするにあたってきわめて有効であった。また、オーストラリアのモナシュ大学のロバート・スパロー博士を招き、エンハンスメントと健康概念に関する講演会を開催した。

４．研究成果

具体的な研究成果の公表としては、2009 年 4 月に京都大学で開催された応用哲学会第一回大会において、ワークショップ「健康概念の哲学的倫理学的考察(1)」を研究代表者をオーガナイザーとして開催した。同学会においては、研究分担者の出口も「健康」概念の構築と深く関わる統計学に関して「統計学の哲学の逆襲」と題するワークショップを主催した。

まず、ノルデンフェルトの健康概念が WHO の「国際生活機能分類」と比較検討され、健康概念の錯綜は各種の「能力」概念の存在に起因するものであることが明らかとなった。このことは、能力に関する諸概念、例えば ability, capability などについてのメタ倫理学的考察が必須であることを意味する。この考察は、健康概念を社会的構築物であるとする最近の社会学的考察に対して、一定の評価をしつつも、その問題点を明らかにすることにもつながった。ついで、健康概念が社会的な事柄と深く関わるという問題意識は、最近の疫学研究におけるソーシャルキャピタ

ルへの注目、とりわけ社会的格差と健康の相関関係への注目と関連させることになり、この点に関する最新の知見が集積、分析された。さらに、医療の専門家、とりわけ臨床疫学による健康概念の構築の際に用いられる統計学的手法に関しても、科学哲学的な見地から批判的検討を加えるための基礎的考察がなされた。上述のリッチマン理論に関しての研究成果としては、本科学研究費研究と京都生命倫理学会と共催で開催した研究会（2010 年 12 月 26~27 日）においてワークショップの形で報告され、有意義な討論を行った。

また、健康概念と現実的、具体的諸問題との関係に関する研究成果としては、昨年度までの研究成果を機縁として研究代表者が招待された 2010 年度日本公衆衛生学会大会におけるシンポジウム報告がある。本報告は、健康食品をめぐる様々な混乱を法的整備により解決しようとする多くの専門家の考えに対し、それの必要性を認めつつも、この問題の根本には健康概念の混乱、とりわけ専門家と素人の間の意思疎通の不備による混乱があることを、科学理論におけるアクターネットワーク理論を用いて指摘したものであるが、その反響は予想外に大きいものであり、その後も多くの報道関係の取材を受けた。

また、本研究の主要部分により獲得された成果は、医療に関わる統計学的問題、とりわけメタアナリシスに関する科学哲学的研究や、独仏の生命倫理学の再検討とドッキングさせることにより、より精緻な概念構築への道を拓いたといってよいであろう。

以上のような研究成果は、今後論文集として出版することを目指している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

1. Masahiko Mizutani, “Ethics of Privacy”, *Encyclopedia of Applied Ethics* 2nd Edition, Elvesius, 2011 (査読有・掲載決定)
2. 杉村靖彦、「ブランショを読んだ田辺」、『創文』、527 号、査読無、2010、pp.29-32
3. 出口康夫、「ことばと実在：「活動語」の意味」、『哲学研究』vol.589、査読有、2010、pp.25-50
4. 伊藤和行、「ヨハン・ベルヌーイ『水力学』における運動方程式」、『科学哲学科学史研究』、第 4 号、査読有、2010、pp.115-126
5. 水谷雅彦、「バーチャルリアリティは『悪』か？」、『哲學』第 60 号、日本哲学会、査読有、2009、pp. 67-82
6. 伊藤和行、「ガリレオの望遠鏡と天体観測」、『イタリア図書』、41 号、査読有、2009、pp.2-8
7. 杉村靖彦、「宗教と世俗―「近代」とは何であったのか―」、ジャン・ボベロ・門脇健編『揺れ動く死と生　宗教と合理性のはざまで』、晃洋書房、査読有、2009、pp.219-234
8. Yasuo Deguchi, Jay Garfield, and Graham Priest, “Ways of Dialetheist: Contradictions in Buddhism,” *Philosophy East and West*, vol.58, 2008, pp.395-402 (査読有)

〔学会発表〕（計 5 件）

1. 水谷雅彦、永守伸年、尾崎健太郎、津井淳平、「「健康概念の哲学・倫理学的総合研究」科研についての報告」、2010 年 12 月 27 日、京都生命倫理研究会、京都大学
2. 水谷雅彦、「健康食品と健康概念」、2010 年 10 月 28 日、日本公衆衛生学会シンポジウム招待講演、東京国際フォーラム
3. 出口康夫、「シミュレーションは何のために？」、2010 年 1 月 30 日、社会心理学ワークショップ：社会心理学の方法論の再検討、九州大学大学院人間環境学府
4. 神崎宣次、「応用と問題解決」、2009 年 4 月 25 日、応用哲学会、京都大学
5. 出口康夫、「シミュレーションは社会心理学を救えるか」、2008 年 11 月 3 日、日本社会心理学会第 49 回大会 WS、 社会心理学方法論の再検討パート 2、 鹿児島県民交流ホール

〔図書〕（計 1 件）

1. 位田隆一・片井修・水谷雅彦・矢野智司（編著）、『倫理への問いと大学の使命』、京都大学学術出版会、2010、265 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

水谷　雅彦（Masahiko Mizutani）
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：50200001

(2)研究分担者

伊藤　和行（Kazuyuki Ito）
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：60273421
出口　康雄（Yasuo Deguchi）
京都大学・文学研究科・准教授
研究者番号：20314073
杉村　靖彦（Yasuhiko Sugimura）
京都大学・文学研究科・准教授
研究者番号：20303795
神崎　宣次（Nobutsugu Kanzaki）
京都大学・文学研究科・助教
研究者番号：50422910